

下野コミュニティエフエム第11回放送番組審議会議事録

開催日時：2022年4月14日10時00分より	開催場所：下野市役所第302会議室
出席委員：伊澤・猪瀬・小島・鈴木・根橋・山内	：6名

※発言については趣旨を変えない範囲で一部を省略・要約し、順不同で記載しています。

委員全7名のうち6名の出席をもって会の成立とし、10時00分に開会した。

- ・小谷野委員より辞任の申し出があったため、伊澤巳佐雄氏を選任した。
- ※小谷野委員からの推薦による。下野市総合政策部総合政策課長職。
- ・伊澤委員：
 - 4月に財政課から総合政策課長として異動してきた。小谷野に代わり今年度から委員を務めさせていただく。
- ・委員長を任期満了に伴い改選し、委員の互選により山内委員が再任された。

1. 報告事項

・運営状況

事業者：

- ・4月1日に番組編成を改訂した。
 - ・毎週金曜21時から「ムーンライトジャム」と題した2時間の生放送ワイド番組を新設し、パーソナリティに和田佐奈子を起用、洋楽やジャズ等の音楽を中心とした大人の雰囲気、対象層を30歳代以上の中高年としている。他の番組に比べてもメッセージが多数届くなど、現時点で放送3回目だが、好評である。
 - ・本会でもご意見のあった高校生スタッフが制作する番組を毎週土曜23時台に開始した。番組の進行や内容の企画・選曲・出演まで全て高校生のみでしている。始まってまだ2回、収録で3回目であるので職員が立ち会ってはいるが、いずれ彼らのみで出来るかと思う。おぼつかない部分も当然あり指導監督はしているが、リスナーからの反響も届いており、このまま良い方向に続いていけばと思う。
 - ・コロナ関連の情報は引き続き入れながら、イベントなども徐々に増えてきているので、そういった情報も紹介している。
 - ・他、大きな変更はないが、パーソナリティの配置換えを行った。
 - ・下野市との連携特別番組を3月末に天平の丘公園から実施した。今回は来園客も多く、花まつりは中止になったが、多くの人が見ている中での公開放送が出来たのは良かった。特別放送については今後も下野市と相談し良い時期に出来ればと考えている。
- (ケーブルビジョン株式会社ラジオ事業部管理責任者)

2. 審議事項

・議題①…番組内容について

事前に送付した資料(記録物)を各委員が聴取し、それに対して委員が意見を述べた。

※2022年3月16日放送「アフタヌーンプラザ」

事業者：

審議対象番組は、毎週平日14時から1時間55分の生放送の「アフタヌーンプラザ」で、3月16日水曜放送のものをお聴きいただいた。

午後の時間帯にくつろいで聴いていただける雰囲気と内容としており、主婦や高齢者を主な対象として、子育てや暮らしの話題を中心に構成している。

水曜はパーソナリティ自身も実際に子育てをしていることもあり、子育てのコーナーがあるなど、子育て中または子育て経験のあるお母さんの共感を得られる内容になっている。他の曜日も子育て中か子育て経験のあるパーソナリティを配置して、子育ての知識や話題、暮らしの話題などを提供している。音楽についてはパーソナリティの年代もあり多様だが、曜日により特色があり、演歌や歌謡曲なども選んだりしている。

小島委員：

「知んなかった」・「知んなくて」との言い方が気になった。「知らなくて」の方言で私どももこういった言い方をするが、やはり放送なので標準語の「知らなくて」とすべきではなかったか。また「～ですけども」が多用されて聴きづらかった。

伊澤委員：

同様に気になった。方言を出すことで親しみやすくしているのか、それとも小島委員の発言の通りなのか、検討すべきと思う。

山内委員長：

標準語を優先するのか、地域色を出すのか、方針としてはどうか。

事業者：

難しい問題だが、パーソナリティが基本的に地元の者が多いので方言も直していない。ただ、ご指摘の通り聴きづらい部分も出てくるため、あまりに酷い場合は指導している。放送業界のアナウンスの基本はNHKさんのように標準語ではあるが、我々は地域放送であるので、線引きが難しいが、明らかに間違いである以外の方言的なところはそのままやっている。それに、当地は各地から転入している人も多く東北弁や大阪弁が基本の人もいるので、プロであれば別だが、市民パーソナリティということで直していない。今後も、様々なご意見を活かして指導をしていきたい。

鈴木委員：

私は全く気にならなかったし気が付きもしなかった。他のある局では、パーソナリティ何人かは「栃木生まれ栃木育ちなので栃木弁でやります」と番組で前置きをしていたので、そうしてみてもどうか。

また、お子さんを連れて宇都宮のベルモールと真岡の子供広場に行ったとの話題があり、その終わりに「市内ではなくてまわりの話」と言っていた。市内ではなく「まわりの」。若者の表現なのかも知れないが、気になった。

ただ、若者も対象にして気軽おしゃべりということで、ありなのかと思った。

山内委員長：

「〇〇的な」はあまり気にならなかったが、表現や使い方で気になったところはあるか。

根橋委員：

どちらの例も違和感なかった。この番組に限らず、パーソナリティは各地から来た方もあるというので、出身地の話し方など個性があり、それを一律にするのは難しいと思う。

山内委員長：

新しい表現をラジオから覚える、パーソナリティそれぞれの個性というのも確かにある。表現を意識して、個性を残しつつ指導をする、そのような方針ということでよろしいか。

事業者：

ご意見を参考に指導していきたい。

根橋委員：

どのパーソナリティも非常に勉強されていると思った。色々な情報をそれぞれ入手して勉強されているなど感心した。

ただ、今回の番組では「新学期に向けた子供の安全」というテーマがあったと思うが、途中に「防犯情報」で警察署からの情報が入っていたのでテーマと結びつけるべきかと。最後にも「注意しようね」などと結論的にまとめた方が良かった。

山内委員長：

警察署から最新情報をいただいて、それをそのまま番組で使っているということか。

事業者：

「防犯情報」は、主に下野警察署からの情報を元としている。ただ、最新情報が毎日のように届くわけではないので、特殊詐欺などといった安全・防犯などの普遍的な情報や、ルリちゃんメールからの情報を入れている。これはパーソナリティが収集しているわけではなく指示に基づいて採り上げているので、テーマなどと上手く連携できてない部分もある。番組の一体感を出すよう指導はしているが、極力上手く連携するよう図っていききたい。

鈴木委員：

番組の構成は、日替わりやフリートーク・楽曲など分類されているが、これについてはパーソナリティ作っているのか、とすると大変な勉強をされているのではとびっくりした。今回は「春」・「子ども」というテーマで、パーソナリティ自身の体験を元にしたものでよくまとめられていると思う。その中に「防犯情報」が入っていたので、なるほど小さいお子さんが成長するとうこういう心配もあるんだなと結びついた感じもしないでもなかった。ただ、ニュースや天気予報は外部からの情報と思うが、選択基準がよくわからなかった。例えば、天気予報は下野市と限定しているのに、ニュースは市外や海外など範囲が広い。前回の審議会で、世界・国内・地域と、各ニュースを分けている、ということだったが、今回は、栃木市の鯉のぼり、足利市の国体、栃木県のコロナ情勢などとニュースがあった。新聞各社の県内記事から選んだのだろうが、これらはパーソナリティが選んでいるのか、または会社で指定しているのか。

事業者：

番組の構成は、他の番組も同様だが基本的にはこちらで骨子を作って、その構成によりここは曲ここはトークと決めている。委員に資料として配付している構成表がそれになる。これに基づいて日々の番組を各パーソナリティが作っているが、2時間全部を作っているわけではなく、ニュースや交通・天気のように指示に基づいて情報を収集している部分、指示された各種の資料や台本を読み上げる部分、パーソナリティが考えるトークの部分、というように番組の中でもそれぞれ異なる。

ニュース・天気予報であるが、天気予報は宇都宮气象台から協力を得て下野市の天気をピンポイントで情報をいただいている。ニュースは独自に集めるわけにはいかないので、「FMゆうがおニュース」に関しては、新聞各社の記事から引用させていただいている。であるので、下野市のニュースがなかなかなく、地域の優先順位を付けた上で県内全域を対象として記事の採り上げている。優先順位は下野市内や下野市関連の記事を最優先とし、次に近隣の宇都宮・小山・栃木・真岡各市と上三川・壬生の各町、それでも足りなければ県内の他の地域ということにしている。

情報源はあくまで新聞の記事ということになるので、地域や内容はそれに左右される。それ以外のトークの部分での話題や情報は市内を中心としているが市外・県外もあり得る。

鈴木委員：

とすると、生活情報や娯楽情報はあがるが政治経済情報というのはあえて避けているのか。例えば、今の市長は今度の市長選には出ないとか、市の人口動態だとか、待機児童だとか、そういう話題は取り上げられない気がするが、いわゆる通常のニュース、国際的な話など、そういったものはあえて取り上げないということか。

事業者：

政治経済情報をあえて取り上げないということではないが、県外のニュースであったり、情報源にあまり流れてこないもので取り上げようがない。

鈴木委員：

地元新聞は。

事務局：

地元新聞は使用できる記事の制限が1日3本までと厳しく、それでは1日中同じ記事になってしまうので、現在のところ使っていない。ただ、地元紙であり、支局も市内にあり、当然だが最も使わせていただきたい思いはある。地元新聞とは今後も色々と話しをして、連携できるようにしていきたい。

小島委員：

今市民にとって最も関心事は市議会議員選挙などあり、地元新聞に採り上げられているようなこともラジオで聴きたい。色々と事情はあるようだが、あると良い。

事務局：

隣の群馬県の地元新聞は逆に積極的で、こういった放送局に情報を流してくれている。費用も安く、記事も使い放題など利便性も高い。こちらの地元新聞にはそういった習慣が今までなかったからではと思うので、こちらが要望していきたいと思っている。

小島委員：

地元の新聞社なのだから仲良くやるのが筋では。大人の事情というのはおかしい。

事務局：

県内の他のコミュニティ各局はニュース番組をやっていないため、そういうシステムが構築されていないという事情があると思う。なので県内コミュニティ各局で今後連携して地元新聞に話が出来れば、システムとしてもう少し予算を抑えて提供していただけるなど出来るのではないかと思う。やはり1局のためだけにシステムを作るというのは難しい。

根橋委員：

ニュースを実施しているのは当局だけということか。

事務局：

ニュースの時間をはっきりと設けている県内のコミュニティ局は当局だけではないか。ただ、全国ニュースをAIアナウンサーに読ませているニュースは例がある。

根橋委員：

AIニュースは地域のニュースではないということか。

事務局：

聴く限り全国ニュースである。県内ニュースに限っているのは今のところ当局だけかと。各局それぞれの方針もあると思うが。

猪瀬委員：

初めに意見のあった「知らない」等の若者の言い回しだが、どこかの知事が言っていた「〇〇ファースト」があったが、それと同じように「リスナーファースト」として考え、聴取者に解りやすい表現を使うべきかと思う。そう言われても、40代などには解らない。なので、そういった若者言葉などは使わないようにし、そのように指導する。そうすれば、何を言っているか解らないということが解消される。要するに翻訳が必要な表現の仕方は避けるべき。聴きづらくなると番組から離れるのが早い。

山内委員長：

リスナーファーストとは非常に良い。コミュニティ放送において重要だ。

猪瀬委員：

我々のように商売をしている者には顧客第一主義というのがある。

鈴木委員：

リスナーが登場する番組は面白い。加盟店レポートでもお店の方が出ていらっしゃり、お店や商品のPRをリポーターとしていた。私もいつも通って知っているお店があるが、これを聴いてネットで調べたりしてしまった。お店のPR番組ではあるが地域のPRにもなっている。こういう番組は街の活性化にもつながる。

また、個人的なことだが、私の妻も先日ゲスト出演し、色々なところで出演したことを言って回って喜んでいて。パーソナリティとの打ち合わせも15分ほどだったとのことだが、打ち合わせも解りやすかったと。リスナー参加番組は色々な意味で良い。

伊澤委員：

お店のレポートは非常にリアル感があり、ラジオだが目に浮かぶようで非常に良かった。ただ、宇都宮市のベルモールや真岡市の公園の話題があったが、市内の紹介をして欲しい。「薄墨桜がもうすぐ咲きます」といった市内の地域の話題は他の番組でもあるだろうが、この番組しか聴かない人もいるだろうし、地域の放送なので市内をもっと紹介して欲しい。

根橋委員：

今の意見は市側からの要望ということになると思うが、市役所の関係はどういうものか。放送局は市が作り、それを委託されたのが会社で、番組編成の責任はそちらにあるということで審議されているだろうが、今の伊澤委員の発言は市側の要望に聞こえる。

事業者：

先ほどの発言はあくまで委員としてのご意見と理解している。ご意見やご要望は他にも市役所に限らず地元の個人や団体等からいただくが、何れも当社の責任において判断をし、参考にするなり採り入れるなりしている。市側からのご意見やご要望も当然いただくが、「こう言われたからこうします」では放送局としては適切でなく、ご意見ご要望として、あくまで参考にさせていただくということで受け取っている。「こうしてほしい」というご要望は設立の経緯からあったが、最終的には事業者である当社の責任において判断し、採り入れるべきところは採り入れている。

根橋委員：

設立趣旨が「災害時に活用する」というだけで、市が局をどうしたいのかよく見えない。前回議事録に小谷野委員の発言で「スポンサーが少ない何かしなければ」とあったが、当事者としての意識が低いと感じた。市においてどういう立ち位置か、よくわからない。

事業者：

市からは、「市が放送局設備を作ったのでこれを利用して放送業務をしてください」という募集があり当社が契約したということ。その契約に基づいて当社の責任で運営するが、要望なども当然あり、それも運営事業者である我々の責任で判断し運営していく形である。「こうしろ」などとは市側も当然おっしゃらない。ただ、地元自治体と連携していくのは、コミュニティ放送の基本であり、防災などは我々の役割としてやっていくべき部分である。

鈴木委員：

市は「コミュニティ放送局を作りたい」とハード面での初期投資を行い、貴社が入り、局の運営を貴社が任せられたと。

ランニング面は補助金が出ているわけではないのか。

事業者：

その通りで、ランニング面も補助金としてはいただいていない。

鈴木委員：

番組編成に関しても市から「これやってあれやって」はないということか。

事業者：

その通りだが、市が一顧客として提供している「ピタッとラジオ」やインフォ等には、ご指示やご要望は当然いただいている。

鈴木委員：

ということは、下野市自身がもう少し番組を買ってくれれば、市のPRをもっとするし、他の店ももっと買ってくれればもっと多く出られるということか。

事業者：

そういうことになる。

鈴木委員：

そうすると、市のPRがどうしても足りないのと問われれば、市が買ってくれないからということだ。

事業者：

我々としては、自治体に言われたからではなく、コミュニティ放送の本来の使命として、地元の情報を自主的に入れなければならないというのはある。ただ、商業放送であるから、そういった部分と上手くバランスを取って運営する必要はある。

根橋委員：

市民参加をもっとしていこうというのは貴社が独自でできるということか。

事業者：

市民参加は番組へのゲスト出演や街頭インタビューなどで開局当初から考えていたが、開局して即コロナということになってしまったため人数制限やイベント等もなくなるなど、想定通りできなくなったという状況がある。状況を見て今後やっていきたい。

加盟店については、商業放送であるので、それ以外を取り上げないということではなく、いただいている部分を特に大きく採り上げるというのが一般的なことと理解いただきたい。しかし、それとは別に、地元でも知られていないお店などを広く知っていただくような、地元のPRも重要である。商業的な部分と地元貢献とのバランスを取って運営していく。

根橋委員：

加盟店は放送協力とは別か。

事業者：

別であり、加盟店は誌面への掲載と加盟店レポート等放送との両方でPRするもので、放送協力は料金をいただいて放送しているもので、それを誌面にサービスで掲載している。

根橋委員：

レポートを聴いていると同じところが何回も出てくる気がする。

事業者：

レポートは基本的に各店月1回ずつなので「何回も」ということはあり得ないはずだが、レポートで目立つ店舗とそうでない店舗があり、そういう印象を与えているかも知れない。

小島委員：

「ミッドナイトハイスクール」について、具体的にどこの高校が協力をしているのか。

事業者：

特定の高校の協力は特に得てはいない。スタッフは任意で応募してきた個人の高校生。

小島委員：

各校でも「地域に開かれた学校作り」というのをしている。小・中・高と地域にもっと開かれるべきだろう。高校生ももっと地域に情報発信をするのが理想である。

鈴木委員：

小島委員のご意見には賛成だが、難しい事情もあるのでは。小・中学は義務教育なので全員が市民だが、高校は県立なのでどこから来るのも自由。地元の地名は付いているが、下野市立高校ではないので、ご協力いただくのはなかなか難しい可能性も。

ただ、教育がもっと開かれて、生徒の成長を図るために街と協力して社会に出すのは、非常に意義があることと思う。教育のツールとして、例えば当局の番組を活用するなど。

小島委員：

子供達も、若い時に発信する機会があれば、例えば放送局に入りたいなど夢も増える。そういう経験を若いうちにするのは非常に良いと思う。

また、自治医大は市の広報誌に管理栄養士さんが意見を出してくれたりと、協力関係が出てきたので、学生さんや職員の方も良いかと。

山内委員長：

この春の新番組とのことなので、まずはどう受け入れられるのか、今のご意見を参考に、反響なども見ながら、地元の学校との連携も視野に入れてこの番組を育てていただければ。

3. その他

事務局：

一部委員より要望のあった、連絡手段を電子メールに統一する件、次回以降いかがか。

委員：

賛成。

以上、11時30分に閉会した。